私の歩んだ研究の道とそこからの教訓㉛

海外留学の奨め
―さあ出かけよう！ 求めればきっと誰かが助けてくれる―

眞　弓　光　文*

若い医師が昔ほど海外留学を希望しなくなったと言われて久しいですが，若い時の留学の思い出は一生の宝物．ぜひ多くの人にその喜びを感じてほしいと思っていたところ，今回，執筆の機会をいただいたので，少し昔話をさせていただきます．

私は1980年初夏，31歳で米国アラバマ州バーミンハムにあるアラバマ大学統合癌センター腫瘍研究所のMax Cooper教授の研究室に，リサーチフェローとして2年間留学しました．その数年前，卒後4年目で母校の京大病院に小児科医員で戻りましたが，免疫学に興味のあった私は，当時の小児科には細胞培養を伴う免疫学研究に必要な設備がなかったため，同じ免疫学に興味を持つ同級生のいる京大胸部疾患研究所内科の設備を使わせてもらいながら，「良い論文を書いて将来は留学したいね」と友人と夢を語り合い，研究に励みました．運良く，3年余りで実験がうまくいき，友人が筆頭著者で私が共著者の論文と，私が筆頭著者で友人が共著者の論文の計2編がJournal of Immunologyに掲載されました．この2編を名刺替わりにして，学術誌などで名前だけは知っていた米国の何人もの高名な免疫学研究者に，有給のリサーチフェローとして採用してほしいと手紙を出しました．当時，京大小児科に留学経験者は少なく，また，京大小児科のアレルギー・免疫グループを率いておられた恩師三河春樹先生は，「留学で先輩・後輩の関係ができるのは良くない．君たちには学年に関係なく切磋琢磨してほしいので，教室の人と同じ留学先に行くのはダメ」との立場でおられました．そんな訳で，留学のリクエストを出した相手とはなんの繋がりもなく，当然，多くはいつまで待っても返事もありません．そんな時，Cooper先生から「グラントが決まったので，リサーチフェローとして有給で雇っても良い」との待ちに待った返事が届き，私は二つ返事で飛びつき，アメリカに留学することになりました．

Cooper先生は元々小児科医で，臨床免疫学の大家R. A. Good先生のもとで免疫学を学ばれた方です．当時すでに，Bリンパ球が分化する器官をニワトリで同定し，Bリンパ球ontogeny研究の第一人者として高名でした．実はCooper先生のLabには，京大病理の故濱島義博教授（当時）の教室から久場川博三博士が少し前から所属し，Cooper先生から熱い信頼を得ておられました．Cooper先生にリクエストの手紙を出した時，私は濱島先生に書いていただいた推薦状を同封したのですが，なんともいい加減なことに，私はそんなことも知りませんでした．濱島先生と久場川先生のおかげで，会ったこともない私をインタビューもなしでリサーチフェローとして採用してくれた奇跡的な偶然だったと，後になって知りました．

そんなこんなで，妻と子供2人を連れて，勇んでアラバマのCooper先生のもとへと向かいました．実はこの時が私たち家族にとって初めての外国旅行でした．当時はアンカレッジで入国審査がありましたが，手続きの仕方がわからず，日本人

* 福井大学特別顧問・名誉教授

と思われる旅行者に日本語で尋ねたら，彼は日系3世のカナダ人で日本語はわからないと言われたこと，なんとか入国審査を済ませてニューヨークのケネディー空港に着き，そこからバーミンハム行きの便が出るラガーディア空港に移動する際のタクシーでぼられたこと，ラガーディア空港の受付カウンターで次男がいないことに気づき，もしや誘拐されたかと慌てふためいて（当時，日本人の子供を誘拐して人身売買する噂がまことしやかに語られていました），思わず「なぜ手を繋いでいなかったんだ！」と自分の責任を棚に上げて妻にあたったこと（当時4歳でミニカー好きの次男は見たことのないアメ車が珍しくて，タクシーを降りたところで車に見とれており，何人ものアメリカ人が迷子かと心配して取り囲んでいました），次男が無事でホッとしたのも束の間，なんとラガーディア空港の出発ゲートで火事が起き，バーミンハム行きはケネディー空港発に変更となり，大慌てでケネディー空港に戻ったこと，そんな訳でバーミンハム空港到着が大幅に遅れ，迎えに来てくれていた久場川先生が私から遅れるという連絡もないのに待っていてくれて本当に有り難かったこと，翌日にホテルから大学のアパートに移り，当座の必要な買い物を済ませてやれやれと思ったのも束の間，今度はその日に長男が水疱瘡を発症したことなど，最初の数日で沢山の経験をしました．その後の2年間の数えきれない経験を含め，今となってはすべてが大切な思い出です．

ところで，留学時点での私の免疫学研究の実力はまったくお粗末なものでした．私がひとりでできたのは末梢血や骨髄血中のリンパ球を分離して培養すること，培養リンパ球の増殖や抗体産生細胞への分化をアイソトープの取り込みやロゼット法で定量化することなどで，当時急速に普及していたハイブリドーマによるモノクローナル抗体作製はもとより，基本的な実験手技である抗体を作るためのウサギの免疫法や血清から抗体を分離するカラム操作も知りませんでした．それでも困った時には助けてくれる人が必ず現れるものです．私の場合は久場川先生でした．Cooper先生は頼りない私に久場川先生と一緒に仕事をするように指示され，それを受けて久場川先生は先生の研究に必要なさまざまな実験手技を手取り足取り教えてくれたのみならず，先生の研究に貢献らしい貢献もできなかった私を先生のNatureやJournal of Experimental Medicineの論文の共著者にしてくれました．

図　濱島義博教授 Lab を訪問　腫瘍研究所前の路上にて
（右から Cooper 教授，濱島義博教授，筆者）

それでも，肝心の自分の研究は1年近く成果が出ず，大変焦りました．Cooper先生は素晴らしい人格者です．このことは，Cooper先生の研究室に留学した大勢の日本人研究者だけでなく，競争の激しいアメリカ人研究者たちが口を揃えて同じことを言うのですから，間違いありません．そんな先生は研究成果の出ない私をあたたかく見守っていてくれていましたが，さすがに人格者の先生もこれはとんでもない人を雇ったと考えたであろうと思います．ところが2年目に入って（私は2年間という約束をもらっていました），やっと良い研究成果が出始めました．それまでは成果の出ないプレッシャーで，家族と一緒にアラバマ州の外へは旅行したこともなかったのですが，それからはフロリダのキーウエストやワシントンD.C.など，アメリカ各地へ愛車のフォルクスワーゲンラビット（今のゴルフですが，当時はもっと小さかったと記憶しています）に乗って出かけ，広いアメリカを大いに楽しみました．

研究は順調に推移し，2年の期限が来る前に何編かの論文が書け，Cooper先生は「いつまでも居たいだけ居て良い」と言ってくれました．私が「先生の研究室になんの不満もないが，ただアメ

リカの食事がまずく，美味しい日本食が食べたいので日本に帰ります」と答えたら，Cooper 先生，大声で笑われました．

後年，Cooper 先生はより良い研究の場を求めてアラバマ大学からジョージア州アトランタのエモリー大学に移られ，80 歳を過ぎてもなお研究を続けられ，2018 年に栄誉ある日本賞 Japan Prize を受賞されました．久場川博三先生も後年，同じく良い研究の場を求めてドイツに渡り，70 歳代半ばを超えるまで研究を続けられました．そんなお二人の研究に対する真摯な態度を間近で見られたことは，ついつい妥協し怠けそうになる私にとって，最高の財産になりました．

当時，京大小児科から大勢の若い医師が海外留学しました．私は1997年に福井医科大学（現福井大学医学部）に移りましたが，福井からも多くの小児科医が海外留学しました．現在は，海外留学する人が大幅に減っており，大変残念です．私はたまたま運に恵まれ，辛い思いも笑い話ですむ程度でしたが，大変努力したにもかかわらず留学で辛い思いをされ，失意のうちに帰国された方もおられることは承知しています．また，私の留学した時から半世紀近く経っており，事情も大きく変わっています．それでも，私は若い皆さんに留学を奨めたいと思います．“若い時の苦労は買ってでもしろ”です．海外留学は皆さんに日本にいてはできない経験をさせてくれるでしょう．たとえそれが辛い経験であっても，月日が大切な思い出に変えてくれると信じます．躊躇せずに一歩を踏み出しましょう!!また，私たち臨床医にとって臨床の場での経験ほど心に残るものはなく，ついついその経験に引きずられがちですが，科学的思考に裏打ちされない経験則ほど危ういものはありません．日々の臨床での経験を真に臨床医としての自分の成長に結びつけるには，科学的な思考を身につけることが必要です．海外留学で視野を広げ，是非，その力を身につけてください．

＊　　＊　　＊